

博士論文『敬語の原理及び発展の研究』要旨

本書は、日本における敬語の起源と意義・原理について学問的に考察した、世界で初めての研究の集大成である。日本の敬語は最古の文献である記紀にすでに豊富な使用例があり、敬語の出発点は文献以前に遡る。その原初を筆者は日本人の宗教観と遠隔表現のしかたに見る。

日本は自然を神として畏怖する原ユーラシアの多神教的宗教観を、現代まで保持し続ける世界でも稀な国である。日本の自然は、平素は穏やかで美しく実り豊かだが、数年ごとに各地で大災害を引き起こし、日本人にとって賛美し畏怖すべき親のような存在であった。自然の圧倒的な力の前には人間はまったく無力であったから、日本人は自然を凌駕したり改造したりする意欲を持たず、死者は自然に帰って神の仲間入りをするから、日本人の宗教は基本的には先祖崇拝であり、先祖の秩序を乱すことを忌んだ。

日本語においては音を延ばすと遠くへ伝達する表現になる。「おい」と「おいー」の例でもわかるように、これは現代でも連綿と行われており、原始時代においてはこの遠隔表現がウタ（和歌の原型）であった。日本人の世界認識はウチ・ソトで、ウチは自分を中心とするごく親しい人間、ソトはそれ以外の森羅万象で自然も含まれる。原日本人はウチへの伝達には普通の言葉を使い、ソトに対しては音を延ばして言うウタを使った。日本に上下の階級秩序が発生すると、このソトに対する言葉遣いは、上位者に対しても使われるようになり、また上位者から下位者への返事にも使われるようになった。

日本の上位者は自然の持つ三徳（寛容・鷹揚・寡欲）を要求されたため、下位者がウタによって訴える願いやお詫びを寛容に聞き入れ、上下の交流はウタの交換によって行われてきた。ウタが五七五などのリズムや掛詞などの修辞技巧を凝らし、歌となって芸術への舵を切ったとき、日常の訴えのための待遇表現が必要となり、それが敬語となったのである。この敬語は日本独特で、上下の階級間の橋渡しとなる意義をもっており、筆者は「階級遵守語」と命名する。

日本の歴史を通覧すると、下位者が階級遵守語を使って上位者にお願いやお詫びをすれば上位者は寛容にこれを聞き届け、両者一体となって社会を担っていく意識を持ち続けてきたことが瞭然となる。そのため、前近代の日本においては、身分階級秩序が世襲で交替できないにもかかわらず、革命やクーデターがほとんどなく、しかも上下の交流が活発に行われて抑圧社会とはならなかった。敬語があったからこそ、かえって言いたいことが言えたのである。

だが、このような社会運営に不可欠な敬語システムは、明治維新によって崩壊した。それは明治新政府の権力者が生まれつきの上位者ではなかったため、三徳を持ち合わせず狭量の下位者を抑圧し、しかも富を独占する強欲に走ったからである。下位者もまた我が身大事の臆病者となり、前近代の下位者の持っていた社会運営の当事者たる覚悟も勇気も、上位者を階級遵守語によって操る言語技術さえも失ってしまった。

一方、欧米では上下の階級間はコミュニケーションがなく断絶していたが、同じ階級どうしの対等な社会人の間で用いられるエチケットとしての敬語は、相互尊重に基づくその場の円滑な人間関係構築に寄与していた。日本では平安貴族や武士階級間で用いられ、筆者はこれを「礼儀語」と命名する。しかし、日本の大多数の国民の間では、ウチは親しいから無敬語でコミュニケーションし、敬語といえばソト（上位者）に懇願・依頼する階級遵守語だけで、対等なよく知らない他人との間で使う礼儀語が発達する余地はなかった。

明治維新以後の悪しき上下の意識変化と階級遵守語の効果の薄れ、そして伝統的な礼儀語不足が現代日本の閉塞状況を生み出し、さまざまな社会問題の原因となっている。これらの解決の糸口は、敬語の原理を再認識し、階級遵守語を復権し、礼儀語を浸透させることによって見いだされるであろう。

要点は、大人（親・上司）になるための教育と、自立した社会人になるための教育である。前者が正しく行われれば、組織が有効に機能し腐敗と無縁でいられ、部下の希望やアイデアが適切に採用されて利益も生み出され、しかも現場に手厚く待遇されて国民が豊かになり、組織は世界に確固たる地位を築くことができるだろう。健全な日本の組織は階級遵守語で作るのである。また後者が正しく行われれば、会社や組織を離れて街に出たとき、年齢・性別・地位に関係なく互いに対等な社会人として、相互尊重の精神で和やかな会話や挨拶を交わし合えるだろう。潤いのある日本の社会は礼儀語が作るのである。

このように、日本の社会は敬語のあり方とそれを実践に移す教育が担っているのである。敬語の原理を考究し実践に移すことが、日本の未来のあるべき方向を示すと考える所以である。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	浅田 秀子
論文審査担当者	(主査) 教授 斎藤 倫明 教授 小林 隆 教授 才田 いずみ
論 文 名	敬語の原理及び発展の研究
<p>本論文は、日本語における敬語の起源および発展の在り方に関し、原理的かつ本質的な考察を加えたものであり、「序説」「総論（第一部・第二部）」「各論（第一部・第二部）」から成る。</p> <p>「総論第一部 敬語の原理－敬意表現の起源と意義について－」は、日本語における敬語の起源と発展の在り方、それに基づく敬語の基本的類型を論じたものである。古代日本人は、ウチ・ソトといった世界認識を有し、畏怖すべきソトの世界の森羅万象に対して、自らの願いを訴える際に音を延ばした遠隔表現を用いた。これがやがてウタとなるが、ウタが洗練され芸術化するのに伴い、代替表現として敬語表現が発展したとする。その点で、下位者と上位者との交流を専らとする「階級遵守語」を敬語の基本的類型と認定し、その具体的使用例を時代ごとに詳しく検討する。なお、他に上位・下位の区別が明確でない場合に使用する「礼儀語」、自己の品位・階級を保つために使用する「自己品位語」といった敬語の類型も存在する。</p> <p>「総論第二部 現代の待遇表現の構造と実態」は、日本人の関係認識がウチ・ソトからウチ・ソト・ヨソへと変化したことにより、現代の待遇表現の使用実態および使用意識がどのような特徴を有するようになったかという点を、「これからの敬語」（1952 年）、「現代社会における敬意表現」（2000 年）、「敬語の指針」（2007 年）といった国語政策の変遷を批判的に検討することを通して明らかにしている。また、そういった現代の待遇表現の基本的構造が崩れることによってどのような問題点が生じているか、それに対して敬語論としてどのような方策を提言できるのかについても述べる。</p> <p>「各論第一部 現代の待遇表現の特徴」は、現代の待遇表現に見られる「基本原則」、「特徴的な現象」について明らかにした後、「命令・依頼表現」、「忠告・禁止表現」、「あげる・もらう・くれる」といった「恩恵授受表現」を取り上げ、そこに見られる様々な形式の「敬意の段階」を一覧表示するとともに、その段階を左右するファクターについて具体的、かつ詳細に論じる。</p> <p>「各論第二部 現代の待遇表現の種類」は、従来、断片的にしか取り上げられなかった「敬語に見られる文法表現」、「肯定・否定の応答」、「問い直し」、「挨拶行動での待遇表現」といった様々な表現類型における待遇表現を網羅的、かつ体系的に取り上げ、その用法を詳細に論じたものである。ここでは、挨拶表現を広い意味での待遇表現として取り込んでいる点に一つの特色が見られる。</p> <p>以上、本論文は、日本語における敬語の起源と展開に関する大胆な仮説を立て、それを、敬語使用の歴史的事象を通覧することによって検証するとともに、その延長としての現代待遇表現の原理と様相を詳細に論じている。その深い洞察力に基づいた考察は、従来の日本語学の敬語論には見られない射程を有し、今後の敬語研究に大きく寄与するものと評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	